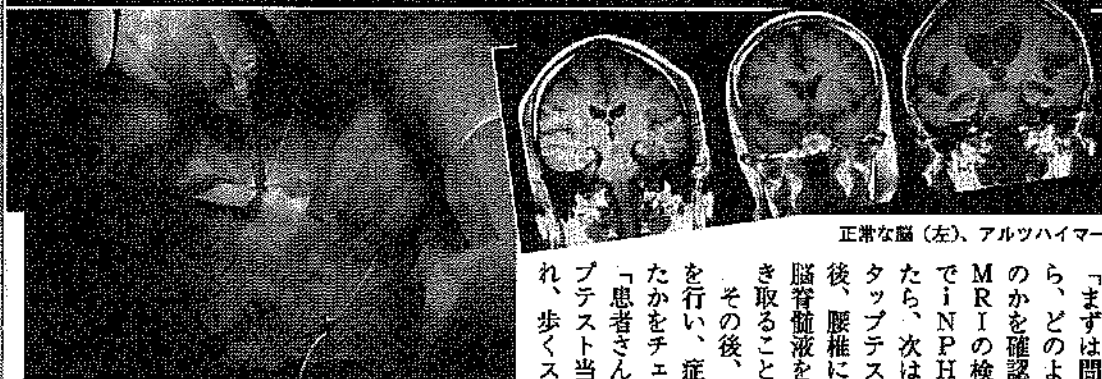


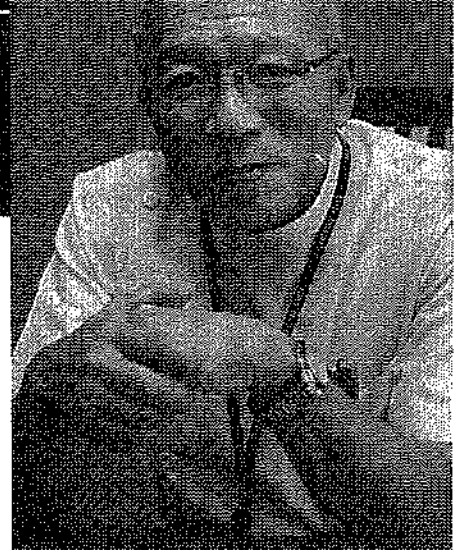
「認知症」を治す手術があった

全国220万人患者に朗報!

伊藤隼也 医療ジャーナリスト



正常な脳(左)、アルツハイマー型(中)、INPH(右)



東京共済病院の桑名信徳院長

現在、日本の認知症患者は約二百二十万人。高齢化が進む二〇二五年には、三百二十万人まで増える見込みだ。もの忘れ、理解力・判断力の低下、失禁——だが、歳だからとあきらめてはいけない。簡単な手術で治るケースもあるというのだ。



宝島社の新刊が反響を呼んでいる

アルツハイマー型や脳血管性などが知られる認知症。これらは投薬によって進行を遅らせるなど、対症療法としての治療法はあるものの、根本治療は今のところない。

るところに特徴があるという。では、INPHの診断から治療まではどんなプロセスなのか。

「まずは問診でいつごろから、どのような症状があるのかを確認します。そしてMRIの検査を行う。そこでINPHの特徴が見られたら、次はタップテスト。タップテストとは局所麻酔後、腰椎に細い針を刺し、脳脊髄液を二〇〜三〇cc抜き取ることです。その後、歩行テストなどを行い、症状に改善があったかをチェックする。「患者さんの中には、タップテスト当日に改善が見られ、歩くスピードが格段に速くなるという人も多くいます」

タップテストから二週間ほど経つと、INPH患者の場合、再び脳脊髄液が溜まって症状が元に戻るといえる。その場合

「LIPシャント術」の手術風景

「唯一、手術で治療できるものがあります。それが『特発性正常圧水頭症』(INPH)です」

「こう語るのは、東京共済病院の桑名信徳院長である。脳神経外科が専門の桑名医師は、四十年近くINPHの治療に取り組み、現在も毎月約十例の手術をこなす権威である。近鉄パファローズの元投手で、脳腫瘍からカムバックした盛田幸妃氏の手術を担当した医師としても知られる。

INPHとは、脳や脊髄の表面を流れる「脳脊髄液」がうまく循環吸収されず、脳の中の「脳室」に溜まる病状だ。この髄液が脳を圧迫して、認知症の症状を引き起こす。

では、他の認知症とINPHをどう見分けたらよいのだろうか。症状として次の三つがあげられる場合、INPHが疑われるという。①歩行障害 ②歩行障害 ③歩行障害 ④歩行障害

には手術をすれば改善が期待できる。手術は体内に細いチューブを挿入し、脳内に溜まった脳脊髄液を体内のほかの場所へ逃がすための「パイパス」を作る。脳脊髄液は体内に吸収され、尿として排泄される。

「技術的にそれほど難しい手術ではありません。時間にして三十五分〜四十五分で終わります」

手術には、脳を起点にパイパスを作る方式と、腰椎を起点にする方式がある。

九十二歳の患者も手術で改善

手術によって劇的な改善があったケースは少なくない。七十代で発症した男性が当時を振り返る。

「通勤で駅に向かう途中で、足がもつれて転び、地面に手や顔を打ちつけてしまいました。ごく平坦な道でしたが、自分で自分の足を止められなくなりました。日ごとに足の具合は悪化し、よろめいてまっすぐ歩けなくなりました。そ

このうち後者の「LIPシャント術」を開発したのが、他ならぬ桑名医師だ。「デリケートな脳にメスを入れるのは、多くの患者さんにとって抵抗がある。その点、腰椎から腹腔へのパイパス手術なら、受け入れやすい。深刻な合併症のリスクも少なくなるメリットもあります」

桑名医師の病院では、検査が二泊三日。手術は前日から入院し、歩行などのリハビリを含めて十日間程度で退院できるという。

その後、トイレに間に合わず失禁、言葉がうまく出ないといった症状も出た。

「医師からはパーキンソン病の薬を処方されましたが、症状は一向に改善せず、桑名先生にセカンドオピニオンをお願いしたところ、持参した画像を見て、INPHに間違いないと診断されたのです」(同前)

手術後、この男性は毎日一時間の散歩を楽しめるまでに回復したという。

「認知障害 物事への興味や集中力が低下する、表情が乏しくなる、声が小さくなるなど」

認知症の一割は手術が可能

「症状が似ているため、パーキンソン病やアルツハイマー型と間違われてしまうことが多いのです。私が診た患者さんの中には、有名な病院を四つも回ったのに、アルツハイマー型と診断され続けた人がいます。INPHの患者は少なくありません。認知症の約五〇％はアルツハイマー型ですが、INPHも約一〇％はいるとみられます」

INPHは発見されてすでに五十年近く経つが、治療技術が進歩したのはここ数十年のことだ。「診断能力が画期的に向上

ったり、凍りついているかのように一歩が出ない場合は、INPHの可能性が高い。パーキンソン病と似ているのですが、INPHの場合は、つま先が外に開いているところに特徴があります」

実は、いまだにINPHを知らない医師も多く、病院で見逃されてしまうケースも多いという。

「極めて稀だが、四十代の患者例もある。「私が以前勤務した病院には、寝たきりで半ば植物状態だった四十代後半の女性患者さんがいました。精神科を経て意識障害と診断されていたようです。その女性の脳にINPHの症状が出ていたので、手術を行ったところ、歩き出したのです。その患者さんは退院することができました」(桑名医師)

桑名医師は九十二歳の患者も手術したことがあるが、その年齢でもかなりの改善があったという。「(もの忘れなどの)症状が出てから平均で三年くらい経って診察に来る患者さんが多いです。中には六、七年という患者さんもあります。その場合でも手術で改善が見られます」

全国でも「LIPシャント術」を行う病院は、徐々に増えているという。歩行障害や認知障害、尿失禁などの三兆候があったら「歳だから……」と諦めず一度は、INPHを疑ってみたほうがよいだろう。